

福山選手(八戸市中) 中村選手(久慈市中)

聖地つかむ継投



光星 甲子園出場決定

何度も振り下ろした右腕で、聖地への切符をつかんだ。第100回全国高校野球選手権記念青森大会の決勝で、苦しみながら5年ぶりの栄冠を手にした

「深紅の大旗、持ち帰る」

八学光星。歓喜の輪の中で、涙交じりの笑顔をはじめさせたのはエースの福山優希選手(八戸・市川中出)と、継投した中村優惟選手(久慈・長内中出)だ。北奥羽出身の2人は、努力が報われたことに喜びをかみ締めながら、「青森に深紅の大旗を持ち帰ってくる」と気持ちを新たにしていた。(金澤千優希)

福山選手は長者レッドソックス、八戸東シニアで小さい頃から硬式野球に触れ、中村選手も小中学校の部活動で白球を追い掛けた。そんな2人が光星に進学しようと決めたのは、2011、12年に甲子園で3季連続準優勝を果たした同校ナインの勇姿をテレビで観戦してから。特に福山選手は中学校の先輩である当時のエース・金沢湧紀投手の力投に感銘を受けた。強豪の門をたたいた2人は、切磋琢磨しながらそろって昨夏の甲子園予選でベンチ入りを果たした。

甲子園出場を懸けた大舞台で力投した八学光星の福山優希投手(左)と中村優惟投手(右)は、弘前市はるか夢球場

で見守った背番号20の中村。出場機会に違いはあったが「先輩を勝たせられなかった」という悔しきは同じだった。先輩の涙に、甲子園への思いは一層強くなった。

今年の夏を前に、2人はエース争いも繰り広げた。福山選手が春先に調子を落とし、中村選手は遠征などで好投。春季県大会地区予選では、中村選手が背番号1を担ったが、最後の夏は福山選手がエースナンバーを背負った。

22日の決勝では、先発の福山選手と中村選手の継投で、猛追する聖愛打線から逃げ切った。「昨年の悔しさを晴らすことができた」と両選手。優勝の喜び、報われた努力、重圧からの解放。涙は止まらなかった。

戦いの舞台は聖地・甲子園に移る。2人がまだ一度も土を踏んだことがない場所だ。目標は全国制覇。福山選手は「エースらしい投球をしたい」、中村選手も「チームプレーで頑張りたい」と大舞台に照準を合わせた。